放談 さようなら1962年

都市計画は市の発展の基礎

一九六〇年の終りは、池川市政の一コマを過去のものにしようとしている。その一コマをかえりみることは、将来への大切な要素ともなろう。そこで広報は市政、その他の関係者を集め、過ぎにし一年をかえりみる放談を行ない、明日への糧にすることとした。残念なことに、市長は陳情団とともに出高し出席できなかったことである。

語る人
市議会議員　松木二郎氏
南国農業指導所長　小松貞紀氏
南国警察署長　松村義喜氏

本年をふりかえつてみて感じたことを話し合つてみたい。

まづ市政面から。

▼合併当初の二カ年は合併以前のあとかたづけの時期で第二放水路の香長中など継続事業に終始したのと、赤字解消への足がかりの時期であった。現池川市長は、非常な期待をもたれて本年一月一日に就任したものだが、……

▼一月一日に就任ということは、全国的にもその例をみないことで、縁起をかつぐのではないが、それだけ市民の期待は大きかったネ▼しかし、再建にうってつけと信頼され、就任した当時の抱負や、公約はいずれも市民の身近に感じるものであったが、まだその糸口さえつかまえていないのはどうしたことだろう"▼都市計画にしろ、市の発展は道路網と看破し、農道の整備は庁舎に優先するといった一連の抱負は、まだ机上のプランにものせられていないことでは、市の将来が思いやられるものだ、

▼ともかく町づくりをはやく立案し、計画に移してゆくべきだネ

—道路網の充実も大切だが予算面での市政は。—

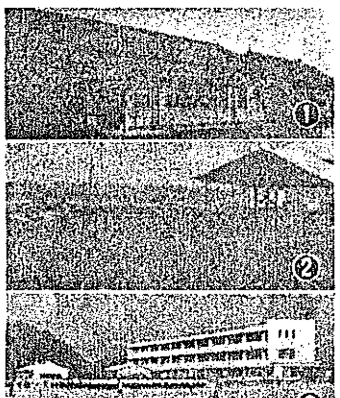
▼事業ができないことの一番の問題点は、予算面にある。

まだ、三才の幼児では、高知市のような、はてな市政はできないにしろ、はやく市自体の市政をつかむことだネ。

▼再建計画の関係もあるのだろうが、僅か十%五千万円の投資的経費では、末端に対するサービスも行きとどかず、住民の自由もうばわれたともいえるネ。

▼その一例に昨年約束した黒潮小の六、七万円のストーブが、まだ設置されないのだから、亀岩小の移転、岡豊町小蓮橋のかけかえなどおしてしるべしである。

▼予算の大半は消費的経費で、約六十%をしめ、赤字補てんに約二十%くまれている、要するに消費的経費の三億円は、市政に対する一番のガンといえる。



鷺ケ池 香長 中学整備

鷺ケ池、香長両中学校は、赤字財政の中で一応整備され、香長の場合、講堂などが未建築といっても、地方では偉観といえるほどりっぱである。
それぞれ五反歩ほどの運動場も仕上がった。
こうして、市の教育施設は、次々に充実されていく。
＝写真の①は鷺中の職員室付近　②は香長着工当時、③は現在の同校

多い保護費 少くない事業費

▼消費的経費のうちでも多いのは人件費と、生活保護費である。とくに生活保護費は現在一億円を要しており、職業化というのか、固定化されたような傾向にあり、年々増加の一途をたどっている。

なんらかの手を加える必要がありはしないか。……

▼人件費といえば、市長のあっせんにより、農業委員の六十三人が、四十人に減ったことはよい傾向で、できれば議員の定数も減すべきだ。

▼また、合併協議書にあるように支所を統廃合し、人事の適正配置を行うべきだネ。

▼人事といえば、助役の選任がおくれているネ。これでは職員の動揺も大きく、市民サービスに欠けているといえよう。いっときたりと主要人事を空白にすべきではない。

▼教育長罷免のときのような決断力をもって選任に踏みきるべきだネ。

▼予算が貧弱ななかにあって、果樹のパイロット地区、同和対策事業のモデル地区、農業改善事業の一般地区の指定をうけるなどみるべきこともあった。

—国有林はその後どのようになっているか—

▼国有林の払下げには、基本財産造成ということで、期待もし、始め無償でくれるものと思ったが、百十町歩余り、時価一億円とみられる国有林を八千百万円で払下げられ、財政をうるおすものとよろこばれたものだ。……

▼しかし甘くはなかったようだネ。売却がおくれ、八千百万円を割る状態で、年間五百十万円の利子の支払や、幼樹林の育成など、かえって赤字をうむ結果となっている。

▼タイの骨よりなお悪い宝の持ちくされということだネ。

—二年後には財政は好転するといわれているが—

▼それは財政再建計画によりはっきりしている。しかし黒字になるには四十二年だが、二十三年は短縮されそうだ。

▼それに固定資産税の税率が、百分の一、五から、百分の一、六に引き上げとなり、評価の方法も変るネ。

▼税金を引き上げることだけでなく、職員の精神的サービス面を強化し、投資的経費を増額すべきだヨ。

市内東崎の名物クスの巨木は惜しくも姿を消してしまった。ここに設置されていた、県農業試験場＝現在大埇＝開設とともに植えられ同場の発展と歩調を合わせるように成長していたが、あまり巨木であるため移植もできず伐採され、事実〝根こそぎ〟姿を消し、跡はかなしく広場になっている。

農業に愛着を

—農業の後継者が問題となっているが。—

▼就職先がひらけたのと、社会情勢から農業に愛着がない。とくに高校にやるとその傾向が強よくなる。

▼このままだと婦人化、老令化されていく、そこで必要なのはトラックターなど農業の機械化ということになる。

▼その必需品であるトラックターに税金が課せられるのだからやり切れない。悪税といわれるのも道理である。

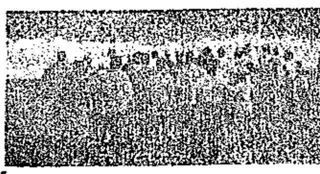
▼工業が発達すると第一次産業がおとろえる、若い内には、家を飛び出すばあの気持がなければいけないがそれに定着しないことだ。▼世間を広くすることはよいが、帰農することだネ。といっても農業は進んでいるのだから若いうちからやるべきだヨ。

▼娘さんも深く考えるべきだネ。給与所得者がもし死亡した場合は、あとにのこされたものは苦労するが、農業ではその心配はない。

▼そのためにも農業の生活状態を改善すべきだ、朝から晩までの労働ではなく、娯楽面も考えてゆくべきだネ。

▼しかしなんといっても、農家の収入の多いことが若い青年を釘付けにする一番の要素だネ。

▼それに勤労意慾が欠けている、経済なきれいな生活にあこがれるのは、テレビ映画の影響が強いといえるネ。



この夏──十市海岸で少年たちが高波にさらわれて二人が沖に流され、巡視船まで救助に出動したが一人は水死。海を恐れよ──の警告である。…

飛躍した果樹 減収の稲作

—それでは農業の振興面から。—

▼この一年間の農業は従前にくらべ、活気的に伸びたといえよう。

▼とくにカンキツについては、六町歩から六十町歩と新植が急激に伸び、里山開発がすすむにつれてまだまだ増植されるだろう。

▼園芸にしても三億円から六億円に、普通作五億円は三〜四割増しと飛躍的に伸び、酪農も、三四〇頭が五百頭とはね上がっている。

—農業構造改善面と指導所の方針は、—

▼構造改善には問題点もあるが、農家には改善し、発展しようとする意欲が強いので、スムースにゆくのではなかろうか。

▼指導面では稲作が多いのでやはり普通作に重点を置いている。しかしそ菜、果樹園芸などはこれから伸びるだろうし、また伸ばしてゆく。……

▼仕事の関係上、構造、類形、目的別農家の集団に別け、研究グループも部門別産業構造別にして指導してゆきたい。

—今年の稲作から—

▼黄萎病の蔓延により、二割以上の減収をみた、反当二俵ちがったとしても、六万俵ちがうことになるから大きい。

▼二期作も黄萎病がきている。この病気は熟色のよいのが特色で、外見したのでは豊作と思われるが、早稲と同様二番稲も普通作といえる。

▼黄萎病の原因としては、ヒメトビウンカによるもので、農家の防除の仕方か農薬の効力がなかったのかいずれかであるが、やはりその方法に原因があろう。

—稲の直播き栽培はどうか—

▼収量的には思ったほどではなかった。品種の選定が大切で八カ所のうち三カ所はよくなかった。

▼床の状態とか、播く時期により発芽揃いが悪るい、除草剤を使用する時期と、技術的な面を確立する必要がある。地域的には増えている。

市とともに生きる気持に

—社会を明るくする面で—

▼青少年補導センターができ、効果を上げつつあることはよいことだ。

▼青少年の不良化、小、中高生の集団犯罪や、発悪化など、いろいろの問題はあるが、社会を明るくするための防犯灯はどうか。

▼防犯灯の設置は必要だ、しかし維持管理に困難性がある、現在の市の財政では市の負担はむつかしい、一部地区住民の負担とか考えられるが、将来は国で補助を出すなど考えるべきだ。

—終りになにか—

▼有線放送が南に引き続き北部にできることだ、市営にするか農協営にするかの問題はあるにしても、これはよろこんでよいことだ。

▼有線放送といえば、一日に六十〜八十回ほどかかり、その三分の二が女性で、病虫害とか肥料のことなどよい方向にむかっていると思う。

▼後継犯の拡張もよいニュースだ、農機や、園芸物など地場産業の育成の上において役立つことだ、現在の三倍にする必要がある

▼市職員の給与は、他の類似団体にくらべて上層部が低く、中堅層が恵まれている。県下では悪るくない方である。

▼職員も要求するだけでなく、長い目でみるとともに市とともに生きる観念をもつべきだ。

▼この一年の市政には特筆すべきものはなにもなかったネ。

▼市長は、この一年内の市政をどう摑み、行政水準を低下させないよう、早く赤字を解消するか、市長の口約である都市計画を如何に実現するか、来年度に期待したい。

—それではこの辺で！—

科学 (可能だろうか?)

科学が進めば思いもよらぬことが可能になる。昔のいろいろの出来事を見るためにに現在では、フィルムにうつしておけば再現できるが、これは生ではない。生のまま見ることができたら誠に面白いことだろう。光は一秒間に約三十万粁の速さで進んでゆく。この光が一年間に進む距離が一光年である。地球から三千光年の場所にある天体から日本をみれば神武天皇が即位の式典を大和で行っているのがみえるだろう。この天体にすんでいるものは想像では地球の文化の発達を思ってはいるだろうが、現実に目にみえるのは神代の日本である。数百光年の位置へ行けば元の大軍が北九州へせめよせた光景がありありとみえることになる。科学が進んで地球から遠ざかっている光を再び地球に逆戻りさすことができたならわれわれはいながらにして、昔の様子を生まで見ることができる。こうなれば映画以上の面白さであろう。われわれ地球人が電波を通信に使用しだして、僅か数十年にしかならない。電波は光と同じ速さで進むから最初の電波は、数十光年の距離にまで、進んでいることになる。若しこの位置にある天体に住んでいる生物が文化が進んでいて地球からの電波を感じて、地球に向って電波を出しているかも知れない。

こういう考えのもとにアメリカでは大きな電波の送受信装置を作って、二つばかりの星に向って電波を送りだしている。はたして返事がくるだろうかなかなか面白い問題ではないですか。

鉄笠(ロケット)

特許出願済
トラックターのつめのさいがけ
耕耘刃復元
耐久度を保証、価格新品の半値
南国市大埇
有限会社 溝渕鉄工所
TEL(南国)3108
有線 ③-12

転入転居の届出は
14日以内に
住民登録